



医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く！

ニッポンの医療現場 第35回

レーザー治療の様子。この治療が可能になった背景には、麻酔の進歩も大きい。薄い濃度の麻酔薬を広い範囲で使っても麻酔の効果が変わらないことが分かったため、今は痛みがほとんどないその方法で治療をしている

立ち仕事の人には要注意

脚にできる血管の“コブ” 「下肢静脈瘤」を治す・防ぐ！

脚にできるコブのような血管の膨らみ。気になったまま放っておいている人もいるのではないだろうか。

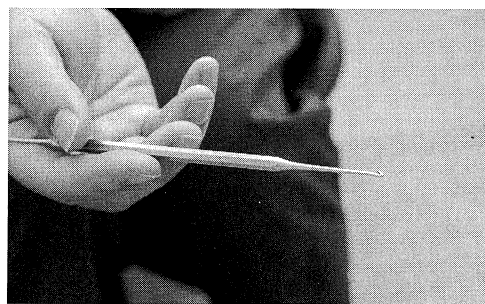
今回は、脚の痛みや皮膚炎が起こることもあるという、この「下肢静脈瘤」の最先端治療や予防法を取材した。

**30代、40代の女性や
男性にも起こる病気**

夕方になると脚がむくむ、だるくて重い、明け方にこむら返りが起こる、何となく皮膚がかゆい……。意外と知られていないが、こうしたありふれた症状や悩みの原因の一つになっているのが、脚の血管の病気、下肢静脈瘤だ。コブのような膨らみが出ることから、とくに女性には「見た目の問題」としても気になるところだが、実は、意外とやっかいな病気だ。

そもそも、静脈というのは、ご存じの通り、古くなった血液を心臓に戻す役割を持つ血管だ。血液が逆流しないよう、＼ハ＼の字形の弁が付いている。下肢静脈瘤になると、この弁が何らかの理由で壊れて血流が心臓に戻りにくくなり、脚（下肢）に血液が溜まってコブのように膨らんでくる。年配の女性に多い印象があるが、患者数は推定で100万人以上。30～40代の女性や男性にもみられる。「下肢に溜まった血液から体液が漏れるため、むくみ

いとうしゅんや●医療ジャーナリスト・写真家 国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。 <http://shunya-ito.tv>



編み物の「かぎ針」のような器具で静脈瘤を引き抜く

やすくなりまし、ひどく
なると血行障害から皮膚炎
が起こってきます。詳しい
メカニズムは分かっています
せんが、疲労やこむら返り
は、血液中の老廃物が溜ま
ったままになるために生じ
ると考えられています」

こう話すのは、お茶の水
血管外科クリニック院長の
広川雅之医師だ。同院は日
本で最も下肢静脈瘤の患者
数が多く、予防や最先端治
療に力を注ぐ。

広川医師によると、下肢
静脈瘤は、もともと病気に
なりやすい体質に、生活環
境が加わったときに起こり
やすく、悪化しやすい。妊
娠も一つのリスクだという。

「生活環境のなかでも、と

くに注意しなければならな
いのは仕事です。理容師、
美容師、調理師など、長時
間、立ちっぱなしの仕事を
している人たちに多く見ら
れます」(広川医師)

脚は心臓より下にあるた
め、立ちっぱなししていると
重力で足に血液が溜まって
いき、柔らかい静脈を押し
広げていく。この状態が日
常的に続くことで、静脈が
徐々に伸びて元に戻らなく
なり、弁も広がってゆるん
でくる。残念ながら、一度、
伸びた血管や壊れた弁は元
には戻らない。

「したがって、まずは予防
が大事です。まずは定期的
に脚を動かすこと。同じ立
ち仕事でも、歩くことが多
い人のほうが下肢静脈瘤に
なりにくいようです。あと
は休憩を入れることですね。
市販の弾性ストッキングを
はくのもお勧めです」(広
川医師)

レーザー治療の登場で 日帰り治療が可能に

一方、治療を受けるタイ
ミングについて、広川医師
は「見た目」「症状」「皮膚
の炎症」の3点を挙げる。

特に皮膚炎については、

下肢静脈瘤が皮膚の症状を
起こすことを知らない医師
もいる。もし、長年、塗り
薬を使っても治らない
ような皮膚炎があったら、
一度、血管外科で診てもら
った方がよいかもしれない。
下肢静脈瘤の検査は、超音
波で確かめるのが一般的だ。
脚にゼリー状の液体を塗っ
てプローブという器械を当
てるだけなので、痛みもな
く簡単にできる検査だ。

治療は、これまでは皮膚
を小さく切開して原因とな
る静脈を引き抜く「ストリ
ッピング手術」が行われて
きたが、最近になってレー
ザーを用いる「血管内レー
ザー治療」が健康保険の適
用となった。血管のコブだ
けは小さく切開して引き抜
かなければならないが、レ
ーザー治療と組み合わせる
ことで、患者への負担は大
きく減ったという。

「レーザー治療では、血管
内にレーザーを入れて、静
脈の先端まで到達させた後、
徐々に引き抜きながら照射
していきます。これで血管
がつぶれ、血液が流れ込ま
なくなり、血管が一本

失われるわけ

ですが、この
部分の静脈
(大伏在静脈・
小伏在静脈)
がなくなっ
ても、特に問
題が起こるこ
とはありませ
ん」(広川医師)

興味深いことに、血管を
つぶすというレーザー治療
の考え方は、古代ローマ時
代からあったとのこと。

「まっすぐな血管は焼け火
箸を突っ込んで焼け」とい
う記録があるという。

この治療の最大のメリッ
トは、治療時間が40分と短
く、忙しい人でも日帰りで
治療できることだ。ストリ
ッピング手術は入院で行う
ことが多いため、多忙で仕
事が休めず、治療をあきら
めていた人も、日帰りでで
きるレーザー治療の登場で、
治療を受けに来るようにな
ったと、広川医師は言う。

こうした簡便で患者に負
担がかからない治療が普及
した一方で、懸念される状
況も生まれつつある。過度
な治療を試みる医療機関が
出てきているのだ。



「気になる人はまずは検査を」と広川医師

こんな例がある。30代の
女性がむくみで悩み、ある
血管外科を受診したところ、
下肢静脈瘤があると指摘。
すぐに治療をした方がいい
と言われた。女性はセカン
ドオピニオンで広川医師の
もとを尋ね、検査を受けた
ところ、「下肢静脈瘤は軽
度でレーザー治療をするほ
どではなく、むくみは別の
理由で起こっている」こと
が分かった。セカンドオピ
ニオンをとらなければ、先
の医療機関で必要のない治
療を受けていた可能性があ
ったわけだ。

近年、入院施設のない美
容外科や整形外科のクリニッ
クでは、高額な日帰り手術
が盛況のようだが、その決
定には他の医師の意見を聞
くなど、より慎重でありた
い。これが現場を取材した
ものとしての正直な感想だ。